
名駅物語。

桃山 でんこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名駅物語。

【Nコード】

N0322Y

【作者名】

桃山 でんこ

【あらすじ】

別れるために、出会うのか。別れがあるから進むのか。運命的な出会い？それとも出会ったことで運命になった？女子高生の明菜とカレシの優と、名古屋のファンキーガールしいな、そして慎司さん。名古屋で起こった運命的な出会いのハナシ。

1、明菜

最悪な気分だった。

カレシの優と

” 今日、行けなくなった。ワリイ”

のメールを最後に連絡がとれないから。

「 集合時間すぎてんじゃん・・・」

” なんで?! ”

” てか、もう金時計にいるし!! ”

” メール返事ください ”

イライライラ

返事が、来ない。

金時計の長針、半分進んだみたい。

「今日はショッピングでもして帰るか・・・」

今日は付き合って3ヶ月の記念日だったのに。
サイテーー

初めて優にこんな強いイラ立ちを感じた。

名古屋駅の待ち合わせスポット。

金時計前を立ち去ろうとする私は

学校帰りの制服のままで、

さつきから何人からか、変な視線を感じる。

エンコー親父が

エロエロキャッチか

あるいは勧誘。

自然に足取りは速くなる。

スタスタスタ

トントン

肩を叩かれ、振り返る。

「すみませ〜ん」

そこには、金髪のショートカットのお姉さんが立っていた。

なんだ、美容師のキャッチか。

無視して立ち去ろうとすると

お姉さんはかぶせて話しかけてきた。

「あのっ、フフフ。この辺で、タバコっフフ吸えるところないですかねフフ」

ラリってる。

怖い怖い怖い

「私未成年なんでわかりません」

なるべく刺激しないように、

本当のことを答えた

「そうかぁーざんねんだあああフフフ。あ、あなたカレシのことで悩んでる?」

「?!!」

「カレシね、たぶん外せない用事が入っちゃっただけで、なんにも悪気はないと思うよフフ」

「え、あの……」

「すみませうん！この辺でタバコ……」

聞き返す間もなく、

お姉さんは去っていった。

変な人！

美人だったけど、あれは薬中か、精神的にイッちゃった人かな？

怖い怖い

名古屋駅って変な人多いもん、気をつけなきゃ！

でも、カレシのこと・・・

?????

その日は、パッセをぶらぶらして

帰り道美容師のキャッチに声かけられて

帰宅して終了した。

お風呂に入ってる間に

優からメールが来てた。

着信も入ってた。

”ごめん、急にバイト先から呼び出されて、
今日バイトになっちゃったんだ。

メール一通入るのが精一杯だった。

ほんと、ごめん”

当たり前障りない返事をして

ケータイを閉じて

考えたのは、金髪のお姉さんのことだった。

2、明菜その2

「ごめん！待った？」

「うっん、今来たところ」

私は小さな嘘をついた。

昨日果たせなかった3ヶ月の約束を
今日は何で返してもらおうか？

年末に向けて動き出す土曜日の名古屋駅は、人混みでごったがえす。

「俺、髪の毛セットするのに時間がかっちゃってさ」

「いつもと同じじゃん」

「いや、なんか今日は寝癖が・・・」

「それで遅刻したの？」

「うん・・・」

沈黙。

シユンとする優を見て、
私は母性のような気持ちを覚えた。

沈黙を破るように、
優の髪の毛をくしゃくしゃと引つ掻き回してやった。

どんな反応するんだろう？

まだ、それが自然に分かるまでの長い年月を一緒にいるわけではな
いから。

沈黙。

あ、やばい。怒ったかな？

「おーい」

優の顔を覗き込むと

優は照れくささを隠した顔をして

「てかさ・・・今日の格好、いいね」

とだけ言って、自分の前髪を触った。

「そうかな？ありがと。ちょっと頑張ってみた」

赤地に白色の襟がついたワンピース。

優が5ヶ月の記念日にバイト代はたいて買ってくれた、大事なワンピース。

今日おろしたばかりだから、

朝から髪の毛を巻いて、メイクもいつもより大人っぽくしてみた。

「いつもと雰囲気違うから、なんか・・・」

「照れちゃった？」

「・・・」

優は無言で私の手を握ると、私に向けて、満面の笑みで

「照れちゃった！！！」

って笑って、

早足で名古屋の街に私を引っ張った。

照れちゃったのは、私のほう。

3、しいな

タバコタバコ、タバコが吸いたい。

ついでにお酒・・・つまみもほしい。

だが、今は昼中である。

我慢我慢

誰が名古屋をこんなにタバコが吸えない街にした？

路上禁煙、駅構内禁煙・・・

「すみませ〜ん」

ふふっ

この人、絶対私のことやばい人だと思ってるよ。
やばい人に声かけられたって顔してるよ。

笑ってはいけない、そう思えば思うほど
思い出し笑いの連鎖が起きてしまう私である。

ふふっ

「この辺で、タバコが吸えるところないですかね？」

みんな怪訝そうな顔で無視していく。

このアウェー感が、私をハイにする！

もうタバコなんてどうでもよくなって、
いろんな人に話しかけた。

「すみませ〜ん」

「この辺で、タバコ吸えるところないですかね？」

あ、やばい、この子高校生だ。

制服着てるもん。

知ってるわけ無いか、っと思うと

より笑えてきてよけいテンションが上がった。

「私未成年なんでわかりません」

あゝあなたはこんな狂ったファンキーガールにも
優しくしてくれる、天使のような女子高生なのね！

そんなこと考えてる自分に爆笑しながら

その子の心を心で感じた。

「残念。ありがとう。あなたのカレシ、
急に外せない用事が入っちゃっただけで、
何にも悪気は無いと思
うよ」

くううー！！

私、かつこいいい……

この言葉だけ言い残して去っていく私……

かつこいいい……

そして、私は私が想像しうる中で一番イケてる表情で

”タバコ吸えるところありますかゲーム”

を、とつぷり日が暮れるまで行つて帰宅した。

「もうクリスマスかあゝ」

白い煙をふうふうと吐き出しながら

家路に着いた。

天使の女子高生を思い出しながら

「あのカップル、クリスマスが正念場だなゝ」

つて、つぶやきながら、私ってイケてるって思った。

4、しいなその2

しいなその2

「お前さ、さっきから吸いすぎじゃない？」

手厳しい指摘にも私は負けない！

「大丈夫、今日は1ミリだから」

「あのさ・・・そういうハナシじゃない？」

そう言っただけ息をついたあんたも、さっきからひっきりなしにシガレットケースに手が伸びてますけど？

って言いたかったけど、言わない。

私のことを心配してくれてるのは、伝わってきたから。

「慎司さあゝゝん」

「なんだよ」

「慎司さんの灰皿も、山盛りになってまーすよん」

やっぱり言っちゃった。

良く思われようとする、自分の首が絞まるだけだから。自然体だよ。思ったことは言わなければ。

「ふっふふ。俺はいーの！ー！」

そう言っ、慎司さんは口の端でタバコをくわえて、目を細めた。

んゝいい表情！ー！

「かつこいいー！！！」

思わず出てしまった本心。

まあ、私なんて軽口女だから大丈夫。

金髪の私と、黒髪ロン毛の慎司さん。

名駅のファミレスで浮いてるかな？

カップルに見えてるかな？

慎司さんは年中Ｔシャツと、ジーンズと、黒縁眼鏡がトレードマークだけど

今日は珍しく襟の開いたカットソーを着ていて、鎖骨フェチの私にはたまらなかった。

「はは。お前調子乗るとすぐ言うよな。」

あきれた調子で言われるとどMの私はグツと来る。

だから、本心が見えないように、私は心を隠す。

「慎司さん、あの子、来ますかね？」

「大丈夫。ギリギリまで悩んでたみたいだけど、俺らのこと悪い奴だとは思ってない」

「そうですか……。じゃあ、もう一本吸っちゃおう！」

「お前女なんだから大概にしとけて。」

店のドアが開いて、店員の掛け声が聞こえる。

「お、来たんじゃないの？」

「おーいこっちこっち」

久しぶりに会った明菜ちゃんは、
少し暗い表情をしていた。

かわいそうに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0322y/>

名駅物語。

2011年11月13日00時49分発行